

寺 報

真宗大谷派松寺永福寺

平成 23 年 10 月 1 日 発行

第 35 号

発行所

富山市梅沢町3丁目1-6

真宗大谷派 松寺永福寺

電 話 (076) 423-1848

発行人 長 真 寿

松寺だより

「お母さんはどこへ行ったの」

「どうしたら死んだお母さんにあえるの」

津波で母親を失った少年が 新聞記者にたずねたことばである

巨大地震 そして大津波 収束のつかない原発事故

それらは一挙にして 無病息災 家内安全 商売繁盛というわれらの

素朴な祈りを 容赦なく破壊しつくした

「神も仏もない」と多くの人が 涙したにちがいない

言語を絶する圧倒的な現実を前に

宗教は何の力になるのか 念仏は・・・

震災の一週間後 降りしきる雪の中

廃虚で一心に犠牲者の冥福を祈る一人の僧侶の姿があった

しかし その祈りはいったい どこへ届いたというのだろうか

聖道の慈悲というのは ものをあわれみ かなしみ はぐくむなり

しかれども おもうがごとく たすけとぐること きわめてありがたし

『歎異抄』第4章より



(床暖房になった本堂)

「御遠忌第一期法要の中止と」被災者支援のつどいの開催について(お知らせ)の葉書を全寺院・教会宛に発送

東北地方太平洋沖地震激甚災害にともなう

御遠忌第一期法要の中止と

「被災者支援のつどい」の開催について(お知らせ)

急啓 3月11日に発生した未曾有の巨大地震と大津波によって、生命を奪われた実に多くの方々に衷心より哀悼の意を表しますとともに、現在もなお深い悲しみの中で苦難の生活を強いられております全ての皆さまに心よりお見舞いを申しあげる次第であります。

このたび、内局として、先行きが全く見えない激甚災害の現実を厳粛に受け止め、現時点においては宗門挙げて災害救援活動に全力で取り組むべきと判断いたしました。よって、3月19日から予定しておりました「第一期法要」を中止いたします。

急な決定であり重ねてご心配をおかけいたしますが、引き続き、あらゆる方途を尽くして救援活動に全力を傾注してまいりますので、どうか格段のご理解とご協力をお願い申し上げます。

なお、3月19日から28日までの間、真宗本廟において、震災に遭われた方々に斉しく思いを馳せ、悲しみを心に刻む「被災者支援のつどい」を開催いたしたく存じます。本つどいの趣旨にご賛同いただける団体には、ぜひ予定どおりご上山ください。

敬具

2011年3月15日

寺院・教会 御中

真宗大谷派

宗務総長 安原 晃

富山教区の御遠忌讃仰

【行事の部】

昆布ロードコンサート

知っていますか？

琉球王国、そして沖縄を

日時 五月十四日一時半

会場 視聴覚ホール

内容 沖縄復帰記念日の前日に沖縄

を学ぶこと、それは遠いけれ

ども実は近い「朋」の現実を

観・知ることであり、日本人

として自らを学ぶ事でありま

す。沖縄を日本の捨て石にし

続けているその現実から目を

そらさないため、昆布ロード

コンサートを開催する。

出演 佐渡山豊 新垣優子 他

【展示の部】

廃仏毀釈 富山藩の廃仏毀釈と

民衆の念仏

場所 阿弥陀堂素屋根二階

内容 明治維新という大変革の時代

に、廃仏毀釈の嵐が富山藩を

吹き荒れました。藩内の仏教

諸宗に対して、一派に一寺し

か存在を認めない「合寺令」

が断行されたのです。権力に

よる激烈な仏教弾圧によって、

藩内にあった二百以上の真宗

寺院が取り壊されました。

この廃仏毀釈を「法難」とし

て捉えきれなかった教団の歴

史を受け止め直します。

ご案内

十一月四・五日(金・土) 両日共 午前十時〜(午後なし)

報恩講 謹修

法話 城端町大福寺住職 太田 浩史氏

今年も聖人のご恩を偲び、ご恩の中に育っている私を明らかにさせて頂きましょう。どなた様もお誘い合わせの上、ご参詣下さいますよう、お待ち申し上げます。

平成二十三年 十月

松寺本堂に設置された支援箱に寄せられた
東日本大震災義損金

一金33,544円

以上の金品を富山教区災害復興支援ネットワークに届けました。 住職 長 真寿

ご寄進ありがとうございました



【右】受賞作 書「墨華」 長江東町 池淵倅子様
【中】水墨画「瀧」 山室 小野田眞智子様
【左】写経「佛説阿弥陀経」 富岡町 竹腰貞子様

「城端仏壇」
堀川町 元西緑町
長谷川健治様

松寺同朋の会主催 真宗生活講座22年7月の法話抄出

朝日町 蓮通寺住職 河村 浩氏述

信心をうれば暁になるがごとし(2)

中国に鳥巢というお坊さんがいた、ある人から「仏教の真髓を短い言葉で伝えてほしい」と問われた。そこで「良いことせよ、悪いことするな」と答えたら「お言葉だけでも、そんなことは三歳児でも知っております」といったので「そのように出来ているか」。「良いことして悪いことするな」というのは、仏の願いですが、そのことが百も承知なのだが出来ないという私がおることに気づきなさいというのが、仏教の真髓だという話なのです。

『正信偈』というのは、自分のようなものところまで弥陀如来の誓いが届いた、「お前こそが私の目当てだというて下さる仏様に出会うことができた、なんと嬉しいことだろう」という歓びの歌です。

法蔵菩薩という人がいて、世自在王仏を訪ね、そこでいろんな国を見せてもらって、そこに住む人びとの様子を教えられた、その上で、自分はこういう世界を作りたいという誓いを建てられたということが説かれている。そのあと、仏様を無量光とか無辺光とか清浄光とか歓喜光とか、光で喩えられている。そしてお浄土という世界が出来上がったという目出度い話が書いてあるのですが、その上で私のようなものがそういう世界を信じることが、そしてそれを受け入れて保つことは、世の中にこれ以上に難しいことはないというてある。せつかく仏様が光を放って、私を照らされ続けられているのに、いつもいつも背を向けておる、すぐに忘れてしまう、そういう私でありますというておられます。

全体としては喜びの歌なのですが、前半は悲しみの歌でもあるのです。せつかく阿弥陀如来が「必ず浄土に迎え取る」という誓いを建てて下さった、「お前こそが目当てだ」というておって下さるのに受け入れられないという悲しみです。無明の闇に生きている私です。

無明ですね。今は明るいですね、夜になると暗くなってきて、電灯をつけねばなりません。そろそろ寝ようということで電気を消すと、部屋が真っ暗になります。そして朝になると光が入ってきて起きだします。明るくなったり暗くなったりします。それは私たちが明るいとか暗いということを知っているということです。両方を知っているから成り立つ話です。

ところが仏教でいう無明というのは、そういうものではない。私たちは生まれたときからずっと闇におりますので、明るいということの意味が分からないのです。蟬は夏しか生きていませんので、夏ということも知らない。人間は一年中、四季を知っていますから、今は春、次は夏だと分かる。しかし夏しかおらんものは春も知らんし、夏も知りません。経験してない世界ですから。(続く)

あとがき

◆表紙のことは月刊誌「崇信」よりいただきました。親鸞聖人も四十二歳のとき「さぬき」というところで、このたびのような凄まじい現実を前にして、衆生利益のために三部経千部を誦読して、祈らざるをえませんでした。しかし祈ることを途中でやめて常陸の国へ入ったと伝えられます。祈っても祈ってもビクともしない重い現実を前に、人間的努力をやり尽くした深い悲しみと絶望を否定媒介として、「悲しみ祈る私」から「悲しまれ、祈られてる私」へと転じてゆかれたのであります。◆とき恰も宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌が勤まる直前のことで急遽、当局は大幅に内容を変更し、「被災者支援のつどい」として開催しました。賛否両論ありましたが、私としては、音楽を一切排除した点は大いに疑問を感じました。それでも予定通り団体参拝にご参加くださった皆様には、厚く御礼申し上げます。◆本堂の床暖房の工事が完成し、昨年の報恩講には沢山のご参詣をいただきました。また本堂と庫裏に跨り廊下の階段を補修し、段差を緩くしました。◆城端町ご出身の長谷川健治様から、由緒ある城端仏壇を寄進下さいました。真宗独特の素朴さを前にすると、心がなにかしら落ち着く思いです。◆また三面にご紹介した三人の奥様から、それぞれに個性溢れる作品を寄せて下さいました。寺の宝ものとして、ながく重用させていただきます。ありがとうございました。◆「病気になるっても、病人になるな」。いまお寺の掲示板にかかっている言葉です。諸行無常の世の中なるがゆえに、今このひと時を大切に。

(前任職記)